依存 ふくしまの現場から

購買欲 抑え切れず

借金、窃盗「狂っていた」

「これ以上、買ってはいけない」。頭の中では分かっていた。

いわき市の30代男性、花守涼さんは買い物依存症を患い、生活が破綻。窃盗を犯した過去がある。今でこそ、衝動は落ち着いているが「あの時は本当に狂っていた」。

2歳の時、父親が他界した。母親は精神的に不安定で、虫の居所が悪ければ理由なく怒られた。物心がついた頃、周りの友人たちと同じようにテレビゲームや魚釣りに熱中した。だが、そうした好きなもののほとんどに、母親から難癖を付けられ、煙たがられた。自分の存在そのものを否定されたようにも感じた。

母親の職場の愚痴、親戚への恨みつらみを聞かされて育った。いつしか、人を信用できなくなり、恐怖心さえ芽生えた。常に大人の顔色をうかがうようになっていた。

小学生時代、欲しい物は山ほどあった。テレビゲームの新しいカセット、釣りざお、ルアー。母親にねだることが怖くて、それはできなかった。祖母の財布から、こっそりと紙幣を抜き取っては買いあさるようになった。欲しいものを手に入れた時の高揚感が忘れられず、現実から逃れる唯一の手段となった。高校生になっても続いた。

大学に入り、1人暮らしが始まると購買欲に歯止めがかからなくなった。クレジットカードで買い物を繰り返し、借金は約70万円まで膨れ上がった。

卒業後、病院に就職した。務の負荷が大きくなると、決って衝動買いに走った。毎月支払いが月収の2倍以上になることがあった。罪悪感と後悔さいなまれ「もう死んでしまたい」と思ったが、悪循環をめられず、雪だるま式に借金は膨らんだ。

25歳の時だった。患者の金銭管理業務を任されていた時に、魔が差した。患者の金を盗むようになった。そのたびに「絶対に今回でやめる」と誓ったが、しばらくして「これくらい買っても大丈夫」という考えに支配され、また買い物を重ねた。歯止めが利かなくなり、1年以上にわたり盗んだ金額は計150万円ほどに上った。

逮捕も書類送検もされなかった。安堵（あんど）というよりも、「こんなに優しい人たちに、なんてひどいことをしてしまったのだろう」と自己嫌悪に陥った。いっそのこと、罵倒され、処罰された方が楽だったのかもしれない。「患者さんが与えてくれたチャンスを無駄にしたくない」。確かな覚悟が芽生えた瞬間でもあった。

買い物依存症になった花守さん、勤め先の病院で患者から金を盗んだ過去がある

患者の家族から「身に覚えのない出金がある」と職場に連絡が入り、観念した。警察署に自首し、これまで重ねた窃盗を洗いざらい話した。

勤務先の病院は懲戒解雇となった。母親が身元保証人になり、弁護士を立てて被害弁償を進めた。

事件化は見送られた。当時の担当刑事から「被害者が処罰を望んでいなかった」と伝えられた。その患者は、解雇された後の就職先を気にかけたり、経済状況を心配したりしてくれていたとも聞かされた。

ギャンブル、アルコール、薬物、買い物、ゲーム―。やめたくても、やめられない。のめり込み、生活や健康を害しているのに、自分ではなかなか悪循環から抜け出せない。犯罪に手を染めてしまうことも。そもそも依存症の自覚がない場合は少なくなく、治療や社会復帰につながりにくいとされる。東日本大震災や東京電力福島第1原発事故、コロナ禍などの社会的要因が引き金になるケースもある。さまざまな依存症者（アディクト）に光を当て、生きづらさとその先を見つめる。

【依存症に関する悩みや身近な情報をお寄せください】
報道部　電話024（531）4122　メールアドレスhoudou@fukushima-minpo.co.jp